

「未来を選択する力を育むキャリア探究プログラム」

明星学園高等学校

比嘉ちひろ

1. はじめに

「社会をよく知らないのに、将来の展望など描けない」「未来に希望を持ってない」「働くことがイメージできない」

高校生との進路面談の中で、筆者が繰り返し耳にしてきた言葉である。これらの発言は、単なる学習意欲や進路意識の低さとして片づけられるものではなく、生徒が置かれている社会的・心理的状況を反映したものであると考えられる。また高校生の将来が学校という閉じた空間だけで語られがちな現状も少なからず影響を与えていると感じた。

生徒の語りからは、身近な大人以外の多様な働き方に出会えていないことへの焦燥感、周囲の大人が必ずしも前向きに働いているように見えないことによる失望感、さらには課題が山積する社会へこれから参入していくことへの嫌悪感や、自分自身が社会の中で自立して生きていけるのかという漠然とした不安感が読み取れた。こうした感情が重なり合うことで、生徒は将来像を描くこと自体に困難さを感じている。

近年では、このような不安を親や教員、友人ではなく、AIに相談する生徒も少なくなない。生徒自身の内面との接続が弱いまま、AIに提示された進路像をそのまま受け入れ、進路希望として表明してしまうケースも見受けられる。

では、この社会を生きる生徒たちにとって、どのようなキャリア支援が有効なのか。

それは進路が未分化な高校時代にこそ、伴走してくれる多様な大人たちと出会い、越境的な学びと行動を通して、生徒自身の「自己効力感」を高めていくことである。ここでいう「自己効力感」とは、特定の職業に就けるかどうかといった結果の成否ではなく、社会と関わりながら自らの進路を考え、試行錯誤し続けられるという認識をさす。そして、このような「多様な他者との協働²⁾」こそが、最適解がない社会において、困難に直面しても不可解な状況を耐え抜き・生き抜いていく力（ネガティブ・ケイパビリティ³⁾）を培い、未来を選択する意思決定力を育むものにもなると考える。

このような仮説のもと本研究では、産・学・民連携のもと「高校生による小学校への

¹ 心理学者アルバート・バンデューラは「自分は適切な行動を上手くできるという効力予期（自己効力）」とその「行動がどのような結果をもたらすか（結果予期）」の認知的要素が行動の先行要因として最重要であるとして「自己効力感」を提唱した。（『新版キャリアの心理学』渡辺三枝子 ナカニシヤ出版 2018）

² 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』2018（P190）

³ 帯木 蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ——答えの出ない事態に耐える力』朝日選書 2017

環境出前授業」や「高校生主催の講演会」、そして対話の場を構築するための「ファシリテート・ワークショップ講座」を実施し、その後の生徒の意識・行動の変化を、アンケート・会話分析によって考察した。詳細は、「3. 実践報告」の「(2) 期間・実施体制」の「実施内容」(P7~9)をご参照いただきたい。

家庭や学校生活に困難を抱える生徒たちが多様な大人たちとの出会いを通して、何らかの変化の萌芽がみえてきた。それは一人ひとりの生き方に根差したキャリア支援を模索してきた筆者にとって、新たな活動の指針となった。

(1) 学校のプロフィール

実践の舞台は東京都三鷹市の井の頭公園の近くにある私立明星学園高等学校。大正自由教育が盛んだった1924年に創設され101年の歴史をもつ。「個性尊重・自主自立・自由平等」を学校の理念にかかげ、小・中・高を備えている。小中と高校はキャンパスが少し離れていることや発達段階の違いなどもあり、両者の生徒間の交流は乏しいのが現状である。小中は自由教育の理念を受け継ぐ生徒主体の教育実践や生徒観をもっている。高校は受験に即した授業が求められる側面も強いため、知識習得に重きをおいた授業にならざるを得ず、進学実績を求める生徒や保護者も少なくないのが現状である。高校生の卒業後の進路は88%が大・短期大学への進学者であり、その中でも総合型・公募型選抜や、指定校選抜を利用した合格者も多数を占める(25年度卒業生実績より)。よって、受験的知識もさることながら、非認知能力的な活動をいかに継続的にやってきたか、ということも評価基準になるため、本実践においても「推薦のために出前授業に参加した」という生徒も少なからずいた。

高校は2年生からは選択授業の中で理系、文系、実技系、家政系、音楽系、美術系の6コースに分かれていく。美術系や音楽系の進路を選び、その道のプロになる卒業生も多く、多彩な生徒が存在する個性豊かな学校である。

(2) 課題意識

本研究の課題意識は、次の4点に整理される。

- ① 高校生の視野の拡張の必要性：学校・家庭以外に多様な価値観と出会う機会が不足しており、教師でも親でもない斜めの関係の大人との関わりが求められる。
- ② 自由に対話できるサードプレイスの欠如：コミュニティの中に、生徒が立場や評価から解放されて自由に語り合える継続的な対話空間が不足している。
- ③ 異世代交流の不足と価値の偏り：社会人・大学生・卒業生などとの関わりが限定的で、結果として将来像やキャリア観が狭い枠組みに収まりがちである。
- ④ 地域社会との接続と主体的学びの不足：社会課題が遠い存在のままであり、地域と共に学ぶ実践の欠如が主体性の形成を阻害している。

これらの課題をふまえると、多様な進路情報を提示する仕組みを整えることや、学校内でキャリア教育を充実させることも重要であろう。しかし、本当のキャリア支援は最適解がない世の中で困難に直面した際も、他者とつながりながら自分の路を模索する力を育む支援ではないかと考えるにいたった。

（３）研究の目的と問いの発見

本研究の目的は、高校生が学校および家庭という従来の枠組みを越え、多様な価値観を有する大人との対話を通して、進路選択・キャリア形成に対する認識にどのような変化や影響をもたらしたのかを明らかにすることである。特に、教師と生徒という縦の関係でもなく、また家族集団の中の親と子という横の関係でもない位置にある社会人・大学生・卒業生との斜めの関係に着目し、その関係を活かしたキャリア支援活動を学内で継続的に創出することで、生徒の意思決定・社会課題への関心・自己理解にいかなる変容が生じるのかを検証する。その際、オルデンバーグの「サードプレイス」論（2013）⁴ に依拠し、斜めの関係の大人たちが心理的・空間的なキャリア支援の場を学内で生徒と創出することを念頭においている。

そこで実践化に際し課題となったのは、学校外の多様な大人とどのように出会い、学内に取り込む仕組みをいかに成立させるかという点であった。この局面において、株式会社ネオキャリアの高山功平氏との協働が転機となり、教員のみでは得られない企業的視座・具体的事例・人的ネットワークが実践形成に寄与したことを付記しておきたい。

研究課題

課題 1：多様な立場の大人との対話機会は、高校生の進路観・キャリア観にどのような変容をもたらすのか。

課題 2：学校内にサードプレイス的対話拠点を設置することは、主体的学習意欲および社会理解にどのように影響するのか。

課題 3：異世代協働の場は、高校生の自己効力感や「未来を選択する力」の形成にいかに寄与するのか。

課題 4：学校と地域社会の接続は、“遠い社会”を“身近な社会”へと転換する契機となりうるのか。

これらの課題認識に基づき、筆者は 2025 年 4 月～12 月にかけて、高校生が社会人、大学生、卒業生、教員とともに対話・協働する空間を学内に設け、「未来を選択する力を育むキャリア探究プログラム」を実施した。

⁴ 『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』レイ・オルデンバーグ (Ray Oldenburg) みすず書房 2013

2. 理論的背景・先行研究

(1) キャリア教育の現状と限界

文部科学省は「キャリア教育」を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義している（文部科学省, 2004）⁵。この概念が教育現場に本格的に導入された背景には、児美川（2011）⁶が指摘するように「若年層の就労・雇用問題の深刻化」がある。児美川は、1999年中央教育審議会答申を引用し、キャリア教育が「若年雇用問題への対処」を起点として制度化された点を明らかにしている。

さらに「若者自立・挑戦プラン」（若者自立・挑戦戦略会議 2003）は次のように述べている。

「今、若者は、チャンスに恵まれていない。高い失業率、増加する無業者、フリーター、高い離職率など、自らの可能性を高め、それを活かす場所がない。

このような状況が続けば、若者の職業能力の蓄積がなされず、中長期的な競争力・生産性の低下といった経済基盤の崩壊はもとより、不安定就労の増大や生活基盤の欠如による所得格差の拡大、社会保障システムの脆弱化、ひいては社会不安の増大、少子化の一層の進行等深刻な社会問題を惹起しかねない。」（同プラン, 2003）

この背景から、児美川は日本のキャリア教育が抱える課題として以下の2点を指摘する。

- ・キャリア教育の焦点が“就労・職業”に過度に偏っていること
- ・学校教育全体として機能せず、キャリア教育が外付けの活動に留まっていること

筆者の現場経験に照らすと、進路不安や家庭的困難を抱える生徒ほど、社会のためという以前に、目の前を生き抜くことが最大の課題となり、標準化されたキャリア教育が現実と乖離する場面が多い。生徒は社会の資源でも経済を支える労働力でもなく、まず一人の生活者であり、未来を模索する主体である。したがって、外から与える計画ではなく、生徒の経験・語り・選択を基点とした「伴走型⁷」キャリア支援が求められると考える。

(2) 「サードプレイス」概念と教育的価値

本実践報告では、進路形成やキャリア形成における「サードプレイス」の意義に着目し、産・学・民連携によるキャリア形成プログラムの実施を試みた。教育現場や進路支援

⁵ 『キャリア教育の推進に関する総合的な調査研究協力者会議報告書』文部科学省 2004

⁶ 『キャリア教育のウソ』児美川孝一郎 ちくまプリマー新書 2013

⁷ 伴走型支援とは、本人主体の原則に基づき、支援者が指導ではなく寄り添いながら、その時々状況に応じて支援ネットワークを調整しつつ、本人が自分の人生の主役として歩めるよう共に伴走する支援の姿勢を指す概念。（『伴走型支援－新しい支援と社会のカタチー』奥田知志，原田正樹 編，有斐閣 2021）

の議論において用いられる「サードプレイス」論は、レイ・オルデンバーグによる「サードプレイス (Third Place)」概念に基礎づけられている。

オルデンバーグ (1989) はサードプレイスを「インフォーマルな公共生活の中核となる環境」と位置づけ、家庭 (第一の場所) や職場 (第二の場所) を超え、階層や属性に縛られず人々が自発的に集まり得る開かれた場であると述べる。カフェやバー、地域の集会所などがその例として挙げられ、社会的つながりや参加感覚を育む場所として機能すると指摘している。

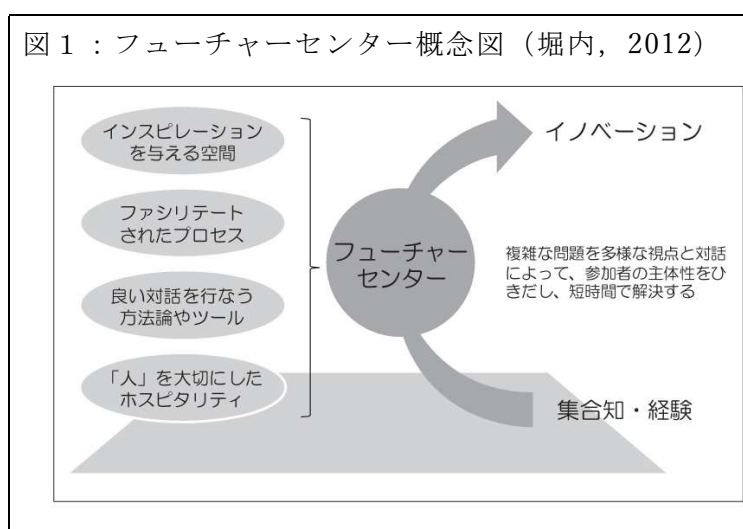
筆者は、このサードプレイスこそが第三の場所となり、閉鎖的な学校環境における進路指導・キャリア教育のあり方を更新する示唆を含むと考える。現場では、家庭環境が不安定で学校生活の継続だけで精一杯という生徒も少なくない。本来、家庭が担うはずの基盤的なサポートが機能しない場合、学校のみが生徒の進路相談先となり、孤立した自己形成を招くリスクが高まる。その結果、短期的な収入獲得のみを優先した進路選択に傾くケースも見受けられる。

阿部 (2011)⁸は、日本において家族以外の人間関係による社会的サポートが相対的に乏しい背景として、家族が社会的基盤の役割を一手に担ってきた歴史を指摘する。その結果、家族機能が低下した際に「孤立やサポート形成のリスクが増大する」とし、家族以外の支えを生み出す社会的装置の必要性を論じている。筆者は、こうした課題意識から、学校内外を接続する新たな「サードプレイス」としてのキャリア支援の可能性を模索し、本研究実践へと至った。

(3) フューチャーセッション (フューチャーセンター) の意義

フューチャーセッションとは、複雑化する社会課題を専門家のみで議論するのではなく、多様な立場の参加者が対話を通じて未来像を描き、行動指針を共有するアプローチである。こうした実践の舞台となる「フューチャーセンター」は、1990年代に北欧から始まり、日本では企業や自治体を中心に普及してきた (堀内, 2012)⁹。

本研究は、将来的に生徒自身



⁸ 『弱者の居場所がない社会』阿部彩 講談社現代新書 2011 (P107)

⁹ 「フューチャーセンター『未来を創造する対話の場』」(『調査季報』vol.170) 堀内一永 2012

がファシリテーターとなり、地域・企業・学校を接続し、そこから見えてきた社会・地域課題に向き合い、未来構想を打ち出し、行動していくフューチャーセンター運営の前段階に位置する。

高校生が社会・地域課題に対して専門家ではない立場で「問い」を立て、大人たちと対等な関係で対話の場を運営し、提言やアクションに結びつけるフューチャーセンターの過程自体が、キャリア形成における学習プロセスになると考えている。よって、キャリア支援の一環として継続的に大人たちと関係が築けるフューチャーセッション（センター）を重要視している。

（４）本研究の位置づけ（先行研究との接続）

本研究の基盤となる理論は、次の３領域の交点に位置づけられる。

①「サードプレイス」×「キャリア支援」

NPO 団体や地域拠点（例：ふらっぼ北柏¹⁰／高校生&若手社会人のサードプレイス in 益田¹¹）では、学校外に高校生の居場所を設け、異年齢交流やキャリア支援を実施している。これに対し本研究は、学内に立ち寄れる第三の場を形成し、教員が関わることでアクセス性を高める点に特徴がある。

②「伴走型支援」×「キャリア支援」

北海道大学の「伴走型キャリア支援プログラム」（肖 2021）¹²は、卒業生がフェローとなり学生支援を行うもので、理解者としての大人が継続的に関わる点に着目した。大学生対象の実践ではあるが、「助言者の存在」や「キャリア形成環境」に与える影響という視点では、高校にも応用可能である。

③「フューチャーセッション」×「キャリア支援」

京都高大連携研究協議会¹³は、「高大社連携フューチャーセッション」を毎年開催している。高校生・大学生に加え社会人ファシリテーターなど多様な立場の参加者が対話し、将来像や学びの意味を考えるイベントである。異なる価値観に触れながら、「自分はどうか生きたいか」を見つめ直す機会の創出の場を提供している。フューチャーセッションが日本では企業に浸透しつつある半面、教育現場には未だ広がりが見られないなかで、この協議会のキャリア形成を促すプログラムは、本実践の高校生キャリア支援にもいくつか重なる

¹⁰ 「NPO 法人キャリア base」サイトより <https://career-base.jp/>（2025 年 12 月閲覧）

¹¹ 一般社団法人「豊かな暮らしラボラトリー」の HP より
https://masudanohito.jp/yutalab01/?utm_source=chatgpt.com（2025 年 12 月閲覧）

¹² 「伴走的キャリア支援による自律した若者の育成の取り組みー北海道大学新渡戸カレッジの事例ー」肖蘭，シュルーター智子，高橋彩（北海道大学高等教育推進機構）『高等教育ジャーナルー高等教育と生涯学習』28（2021）

¹³ 京都高大連携研究協議会が主催し、2016 年度から毎年実施されている。キャリア教育プログラム 公益財団法人 大学コンソーシアム京都（2025 年 12 月 HP 閲覧）

りあうものがあるといえる。ちなみに、本実践では高校生自身が企画・運営・ファシリテートを担う点に独自性を置き、プロセスそのものをキャリア形成を促す機会と見なした構想をもっている。類似の報告として、武蔵野大学が秋田県鹿角市で中高生と協働した地域課題解決型セッション（小暮 2023）¹⁴などが参考となる。

3. 実践報告

(1) 研究調査期間と調査のフローチャート

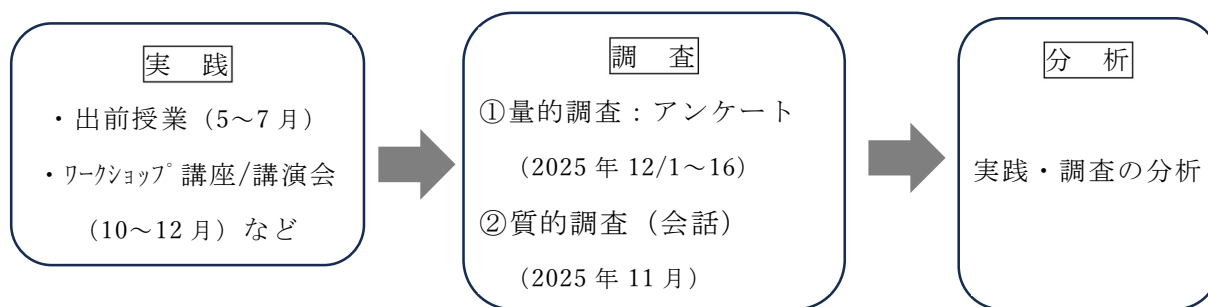
【実践期間】2025年4月～12月中旬

【実践対象生徒】明星学園高等学校2年生～3年生の約20人

（希望者と筆者が顧問をつとめる「社会探究同好会」のメンバーたちで構成）

【アンケート回答者】15名に配布し10人回答 【会話調査対象者】3名

【調査のフローチャート】以下の3段階で行った。



また、本プロジェクトには、産・学・民それぞれの立場から、以下の方々に継続的に企画へ参画していただいた。

産業界：株式会社ネオキャリア 社長室サステナブル推進室 高山功平氏
 市民・地域社会：NPO 法人新宿環境活動ネット代表理事 飯田貴也氏
 学術：早稲田大学公認環境サークルロドリゲス 2024年度副幹事長 矢野創大氏

(2) 期間・実施体制（9か月間の概要）

◆実施内容（敬称略）（表内の桃色，水色，黄色は一連の活動で色分けをしている）

	実施日	実施内容/場所	実施目的	参加者
①	2025年 4月上旬	初回打ち合わせ ／（株）ネオキ ャリア新宿本社	プロジェクト参加 者の顔合わせと目 的の共有	・社会探究同好会の3名 ・社会探究同好会顧問（筆者） ・（株）ネオキャリアの高山氏 ・早大環境サークルの矢野氏

¹⁴ 「中高生と大学生によるフューチャーセッションの可能性 一鹿角市の地域活性化に向けて（前編）
 一」小暮真人 武蔵野大学経営研究所 2023

②	4月中旬～5月中旬	毎週月曜お昼休みに定例会（計3回）／明星学園高校	プロジェクトの方向性決定，各企画の準備開始，環境出前授業の計画策定	<ul style="list-style-type: none"> ・高校2～3年の約10名が毎回参加 ・社会探究同好会顧問（筆者） ・中学校元副校長も小中の連携に協力したいと企画に参加 ・必要に応じて大学生，社会人がオンラインで参加
③	5月27日	明星学園小学校の4年生を対象に，高校生と専門家による環境出前授業を実施／明星学園小学校	未来の環境人材育成のための大学生と高校生によるサステナブル出前授業を通し，自発的に未来を考える力を養う	<ul style="list-style-type: none"> ・高校2～3年生の13名 ・社会探究同好会顧問（筆者） ・（株）ネオキャリアの高山氏 ・NPOの飯田氏 ・早大環境サークルの矢野氏 ・企画に賛同した小中高の教員5人
④	6月	毎週月曜お昼休みに定例会（計4回）／明星学園高校	前回の出前授業のフィードバックをもとにブラッシュアップ	②に同じ
⑤	7月7日（午前）	③に同じ（※出前授業対象者は5年生である）	③に同じ	<ul style="list-style-type: none"> ・③のメンバー ・卒業生の大学・大学院生ら3名 ・昨年度離任された教員2名
⑥	7月7日（午後）	「働くってどういうこと？～それぞれの立場から思うこと～」	高校生・大学生・NPO・社会人・教員が各々の立場で「働くとは」を語り合い，考える	⑤に同じ
⑦	9月～11月	週1回昼休みに定例会実施	11月の講演会に向けて構想を練る	②に同じ
⑧	10月下旬，11月上旬	ファシリテーター・ワークショップ講座を実施（11月の講演会準備企画）／明星学園高校	高校生の自立的活動を支援するため，ファシリテーターやワークショップの進行を学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・高校2～3年生約10名 ・社会探究同好会顧問（筆者） ・（株）ネオキャリアの高山氏 ・NPOの飯田氏 ・中学校元副校長 ・企画賛同教員4～6人

⑨	11月中旬	多様な生き方・働き方をされている方を講師としてお招きし、生徒主体の講演会を開催／明星学園高校	生徒の主体性や場づくりの調整力を育成するとともに、キャリア形成を支援するため	・⑧のメンバー ・ギャラリー約10名（高校生約6名，卒業生1名，中学1年生3名）
⑩	12月上旬	「ESD推進ネットワーク全国フォーラム2025」にて、環境教育からキャリア教育への架け橋という観点で先述③・⑤の環境出前授業を報告／立教大学	・全国の産・学・民による連携企画を学び、本実践の学術的・実践的な位置づけを把握すること ・他団体との情報共有とネットワーク形成を図ること	・(株)ネオキャリアの高山氏 ・NPOの飯田氏 ・小学校元副校長 ・社会探究同好会顧問（筆者）
⑪	12月中旬	⑨の講演会の振り返りワークショップ／明星学園高校	講演会を振り返り、内容の要点を整理することで、次回の企画趣旨を再構成する	・高校1～2年生約6名 ・社会探究同好会顧問（筆者） ・(株)ネオキャリアの高山氏 ・中学校元副校長

（3）プログラム構造と企画内容 ～先述（2）の実践内容をもとに～

【①・②（生徒ミーティング）について】

この期間のミーティングは、高校生と教員、そして企業やNPOの方、さらにはその企画に関するテーマを専門に研究している大学生と③・⑤の出前授業に向けた打ち合わせがメインだった。必要に応じて、学外の社会人、大学生とはオンラインをつなぎ、生徒のミーティングに参加してもらった。高校生が主体的に出前授業を創るにあたり、基盤となる仕組み、方法論は既に技法をもつ周りの大人たちの協力を得ることで、立ち上げをスムーズにする意図もあった。また、高校3年生は大学や専門学校への進学が目前に迫っていたこともあり、オンライン会議後に社会人の方へ個別に進路相談を行う生徒も数名いた。そこで得た助言が、総合型選抜に向けて探究を深めるうえで有効にはたらいた生徒もいた。

【③・⑤（小学生への環境に関する出前授業）について】

高校生のアウトプットの際に社会人や大学生が関わり、伴走しながら共創していく実践の一環として、本学園小学校への出前授業を実施した。本校の高校生は小学生にとって“身近でありながら遠い存在”でもあり、授業を行う先輩の姿を直接見ることは、将来像を描く際の成長モデルとなり得ると考えた。そうしたキャリア形成支援の観点からも、有効な方法論として「出前授業」を選択した（詳細は次ページの【資料1】を参照）。

参加した高校生は、筆者が顧問を務める同好会のメンバーを中心に、筆者からの呼びかけや生徒同士の紹介を通して、自主的に参加を希望した生徒によって構成された。

5月に実施した第1回出前授業では、授業後の振り返りの中で、「より小学生の視点に立った問い立てができないか」「小学生が環境学習をより身近に感じられる仕組みはないか」といった問いが高校生からうまれた。そこで、出前授業を行った4年生の担任を交え、急遽、授業の振り返りの時間を設定してもらうことになった。

この振り返りの時間は約1時間半にも及び、高校生たちは4年生の担任から助言を受けながら、次回の授業に向けた導入方法や内容の改善について検討していた。担任が語る授業論に刺激を受けつつ、それを自分たちなりに理解・再構成しようとする議論が学年を越えて展開されたこと、またその動きが高校生の側から自発的に生まれたこと

に、本実践を通じた大きな成長が見られた。

こうした授業の振り返りを受けて修正された授業案の内容は、以下の【資料1】に赤字で示したとおりであり、それらは7月に実施した第2回出前授業において、高校生自身の判断によって取り入れられ、実践された。この一連のプロセスは、本実践における生徒の主体的な成長を示す一端であるといえる。

【写真】5月実施の出前授業の風景



【写真】7月実施の出前授業



【資料1】出前授業に関する要項・授業案（筆者作）

25年7月4日（金）

明星学園高校 社会探究同好会
顧問 比呂ちひろ

授業タイトル：何かを『みつけた』大人にあってみよう！
～ 小5年生版出前授業 (ver.8) ~

(教員向け授業タイトル)： 果菜の環境人育成のための社会人と大学生と高校生によるサステナブル出前授業
～インプットとアウトプットで自発的に未来を考える力を養う授業～

【1】本時の授業のねらい

大人になっても「みつけた」(興味・関心)を実現・探究しつづけ、仕事にしている人(研究している人)たちとの出会いを通して、小学生が自分の興味・関心に着目し・発信していくことで、「探究」する楽しさに気づく一つのきっかけにする。

【2】本時の授業の意義と位置づけ

明星学園の高校生による小学生への出前授業は、学びのアウトプットや自己探求の場として有効である。特に明星学園小学校低学年で実施されている「みつけた」と連携し、高校生の探究テーマをアウトプットする機会を創出する。例えば、低学年で「みつけた」を通じて身の回りの不思議や興味を深めた小学生が、高校生の授業でより専門的な内容に触れることで、好奇心をさらに広げることが出来る。高校生は、生物やアート、科学など自身が探求しているテーマを「みつけた」として整理し、小学生と実験や制作活動を行いながら知識を共有する。こうした活動を通じて、小学生は多様な視点を含み、高校生は伝える力や企画力を磨く。また、高校生はこの経験を活かし、専門家とのワークショップを企画・ファシリテートしながら、1年後にはアウトプット力をもつることを目指す。校外の大人との「なめぬ関係」が探求の幅を広げる重要な要素となり、継続的な出前授業を通じて、高校生・小学生双方の成長と発見の場が築かれていくことが期待されている。

【3】出前授業の時間・参加者

授業実施日時：2025年7月7日（月）| 時間目予鈴 8:45 / 授業開始 8:50-11:35

4時間目予鈴 11:45 / 授業開始 11:50-12:35

(高校生は第二回定期試験予備日のため原則は自宅学習日であり高校の授業はない日)

実施クラス：明星学園小学校 5年1組 (36名)・・・1時間目に出前授業を実施
5年2組 (36名)・・・4時間目に出前授業を実施

高校生参加者：社会探究同好会メンバー 4名 (14名参加予定)
12 (高校3) 年生:10名、 11 (高校2) 年生:4名

協力団体：畜産推進課 探究学習支援プロジェクト

【R】 飯田貴也 (NPO法人新環境運動ネットワーク 代表理事)
【学】 矢野創太 (早稲田大学創造理工学部環境資源工学科4年、早稲田大学公設環境サークルロドリクス部副幹事長)
【高】 高山ゆ平 (株式会社セキオキア 社長兼サステナブル推進)
【中】 高教員・元管理課) 比呂 ちひろ、堀内 ちか子、高教員3名
【その他関係者】 同好会OB・OG、元教員。

◆小学生グループワークの高校生担当表 (A×4人組=36人)・・・高校生計14名 ()は班活動の際のサポーター

【4】出前授業の内容・進行

時間	授業の流れ (45分授業でつくってみたい)	小学生の動き	高校生・大人
授業10分前	①教室に入り、電子黒板にパソコンを接続する。(高山・比呂) ②生徒も教室に入り生徒の着席位置をみておく。		
授業開始5分前	授業のチャインなる(スタート)		
【導入10分】 0:00~ (チャインは鳴らない)	予鈴のところで、高校生は教室に入っておく。 小学生は担任の指示で班座席(4人)を作って授業スタート。 ＜高山からスタート＞ 導入5分 ●今日の流れ ●あらずじとカップ/説明 ●探究について説明 ●グループ作りの指示とルール説明 ●拍手の練習と注目会話の確認		●授業スタート直前に「預け物」をしかける。 ●小学生が座った目録に預ける。同化する預け場所を工夫する。
0:05~	③ここへ高校生を紹介 ④高校生の導入【ファシリテート：高校生計10名】 ●高校の司会者とその後全体ファシリテーターをするメンバー約4名だけが前に出ておく。高校生(3名)は以下の通り。 【高Aさん】●高Cさん / ●高Dさん / ●高Eさん。】以外、 【高Bさん】「今日は明星学園の高校2年生〜3年生のお兄さん。お姉さん。●高Fさんやってきました。この後皆さんのグループ活動のそれぞれ1名ずつはいていきますので、その間に自己紹介をお願いします!」 ●その後、黒板前に残った前半のファシリテーターをする 【高Aさん】「お話をします●Aと●Cと●Dです。」 【高Bさん】「今日はみんなが小学校5年生の頃にやっていた『みつけた』を思い出しながら、小学校5年生になっても、もう一度やってみたらどう変わっているのかを一緒に探していきたいと思えます。5年生になる間にみんな色々なことを経験して、色々なことを学んだと思います。ここにいる高校生たちも色々な『みつけた』から得た知見や気づきなどを『みつけた』を日々かかっています。」 【高Cさん】「そこでは、私たちがこの授業内に『みつけた』をいくつかかかってみました。これから1分計ります。座ったままで、教室内で2回確認している『みつけた』を発見してください。見つけた生徒は静かに黙っててください。後で聞きますので、ではスタート。」 〜 1分計る(タイマースタート)〜 ⑤【高Bさん】「おわり〜。見つけた生徒に話しますね。まず、グループに気づいた人、手を挙げてください。(挙手した小学生の一人に見つけた場所を言うってもらう)『よく見つけたね。この後に、グループを持って来た高校生になぜグループを持って来たのか少しはなしてもらいますね。今度は、演劇の台本を見つけた人、いますか?』(挙手した小学生の一人に見つけた場所を言うってもらう)『よく見つけたね。そうす。この演劇の台本を持って来た高校生にもこの後、話を聞きます。ではグループと演劇の台本を持って来たEさんとFさん。前に来てお話おねがいします。」 【高Cさん】： 野球の想いを語る。		●小学生が座った目録に見つけた小学生は黙っておく。 ●それぞれ見つけた小学生は挙手し、一人が発表。 ●預けた人(2名)の想いを語る。

00:06~	【高Fさん】「演劇の想いを語る。」 ⑤【高Bさん】「なぜ私たちが皆さんの教室に預け物をしたのか?それは皆が使っている教室を、今皆さんは『見る』という意識をしてしつかり見てくれたので、今までの教室との違いを『発見』してくれました。その「当たり前の景色を視点を変えて見る」と新たな気づきがあることを皆さんに体験して欲しいからです。」			
00:06~	⑥【高Cさん】「今日は、みんなに新しい視点を持って欲しいと思い、高校生の私たちが次の考えて欲しい課題を持ってきました。私が持っているこれはなにか分かるかな? (エコパックとレジ袋を見せて) これ何か分かる人?手を挙げてね。そう!レジ袋とエコパックです。このなかで『地球にやさしい』と思うのはどれか?それが最初の課題です。直感で皆さんが考えていることを教えてください。(スライド:課題を提示)	【小学生】「コンビニで買った買ったレジ袋」 【小】「エコパック。」	●高校生はプリント配布 ★この「問い」では、いずれかが環境に良い、ということをおぼえるのではなく、環境負荷にも様々な側面があること、そして一概に環境に良いとは言えないこと、高校生にも意識して小学生に向き合っていく。	以上
00:10~	【高Cさん】「選択肢は3つあります。①レジ袋、②エコパック、③『?』です。どちらともいえない、考え中、分からないと思う人は『?』に挙手してください。直感で答えてくださいという、自分の考えを整理したい人も思うので、考える時間を30秒とりますね。その後、皆さんの考えを教えてください。では、時間をはかります。」 →高校生は担当班につき、必要なら小学生をサポートする。 →電子黒板に30秒タイマーを表示する。 →30秒経過後 【高Cさん】「では30秒経ちましたので聞きます。それぞれ3つの選択肢のどちらかに手を挙げてください。レジ袋が『地球にやさしい』と思う人は手を挙げてください。」 【高Dさん】→教えて黒板に書く。 【高Cさん】→教えて黒板に書く。 【高Cさん】「?の『どちらともいえない』もしくは『考え中』を選んだ人は、手を挙げてください。」 【高Cさん】「では、各選択肢の中から1〜2名にその理由を聞いていきますね。3つの選択肢の少数派のところからいきます。(板書をみながら)」 【高Cさん】③の『?』を選んだ人で発表してくれる人。挙手してください。」 小学生の発表を聞く → 拍手。 【高Cさん】①の『レジ袋』を選んだ人で発表してくれる人。挙手してください。」 小学生の発表を聞く → 拍手。 【高Cさん】②の『エコパック』を選んだ人で発表してくれる人。挙手してください。」 小学生の発表を聞く → 拍手。	●この際に、高校生の一人は黒板に選択肢の3項目(①レジ袋、②エコパック、③?)とそれぞれ的人数を書き込んでおく。		
【開閉15分】 00:11~00:25	【高Cさん】「実際にどうなのか、大学でそのことを専門に調べている方にお話を聞きます!その前に高山さんにバトンタッチします。」			
【開閉20分】	【高山】			

00:25~00:30	⑦★先野さんのお話(15分)			
00:30~00:35	↓・・・先野さんの話をうけて ★高校生は小学生の「ワークシートまとめ作業」をサポートをする。 ⑧生徒は各自でワークシートを完成させる(5分) ⑨グループ内で想いの共有(5分)			
【休憩10分】 00:35~00:45	① 担任から総評 ② 飯田さんから総評 ③ 高校生からの振り返り(時間次第)			

本学園 HP に掲載された「出前授業の報告」¹⁵記事（学園広報・堀内）の概要も以下に紹介する。

今回の環境学習の出前授業は、NPO 法人新宿環境活動ネットの飯田氏、株式会社ネオキャリアの高山氏、早稲田大学の環境資源工学科 4 年・矢野氏（大学公認環境サークル前副幹事長）らの協力を得て実施された。高校生は顧問教員と複数回のミーティングを行い、スライド・動画・音楽・教室内の「仕込み」（『みいつけた』モチーフの隠し要素）など、子どもの関心を引く工夫を取り入れながら授業設計を行った。

授業の中心テーマは「レジ袋は本当に悪者なのか？」であり、矢野氏が「当たり前を問い直す」視点から、エコバッグ製造の方がエネルギー量が多い場合もあるなど、数字を用いた具体的な研究例を提示。小学生は 9 グループに分かれて対話し、各班に高校生が入り議論をサポートした。

制限時間内に全てを共有することは難しかったが、授業後、小学生と一緒に昼食や遊びの時間を過ごしたことで交流が深まり、振り返りの場では高校生から「小学生の発言力に驚いた」「環境を考える視点が変わった」などの気づきが語られた。また、現在大学に在学する卒業生も参加しており、「大学では自分の意見を主体的に発信できる学生は決して多くない。今日参加していた高校生たちは十分な力を備えている」といった励ましの言葉が寄せられ、高校生にとって自身の力を再認識し、自己肯定感を高める契機となった。

小・中・高・大学・教員・企業・NPO が同じ土俵で議論した今回の取り組みは、産・学・民連携の活動事例であり、明星学園の 12 年一貫教育の強みを実感する象徴的な実践となった。

また、出前授業を受講した小学生が本実践をどのように受け止めていたのかについては、5 月に実施した出前授業の際、4 年生の児童が主催者である高校生に向けて「感想」を記していた。以下に、その一部を紹介する（文中の波線は、筆者が加筆した）。

- ・「エコバックがエコバックじゃないのがむじゅんしておもしろかった。」
- ・「視点を変えていろいろな物を見ると、イメージがかわるようになりました。色々な物を見ているうちに、なんかふしぎなイメージがわいてきました。とても楽しかったです。」
- ・「高校生なのに地球おんだんかについてあんなにじゅぎょうができるなんて、すばらしいと思います。しょうらい私もあなたたちのような授業がしたいです。」
- ・「高校生になったら、みなさんみたいになって、ちいちゃい子たちに、教えてあげたいと思いました。」

¹⁵ 「高校生が小学校 4 年生対象に出前授業を企画・実施しました！ ～ 「みいつけた」でつながる小学生と高校生、そして大学生～」 明星学園 HP より（2025 年 12 月閲覧）

- ・「高校生のみなさんが私たちにじゅぎょうをしてくれるのは、私たちがようちえんに行ってじゅぎょうをするようなことなのでごくむずかしいことだと思います。それなのに、しかいの人の声も大きいし、みんなに優しくしてくれたので嬉しかったです！おべんとうの時は、高校生がはなしかけてくれたおかげで楽しく食べることができました。」

小学4年生から寄せられた「感想」はお礼の意味合いも含まれるが、その中には高校生を通して“未来の自分像”を投影しているコメントも散見された（波線部）。本校では同じ学園でありながら小学生と高校生の交流機会が少ないため、今回の出前授業は小学生にとって「どのような高校生になりたいのか」を考える契機となり、キャリア形成の初期段階に一定の効果をもたらしたと考えられる。

【⑥（「働くってどういうこと？～各立場から思うこと～」）の開催について】

⑥の取り組みとして、出前授業の空き時間に「働くとは何か」をテーマにしたミニ討論会を開催した。高校生、卒業生、社会人、大学生、NPO関係者、本校教職員の約30名が集い、日本財団による世界6カ国比較データ¹⁶（各国の18歳を対象に、学校観・職業観・人生観などを比較）を共有した上で、それぞれの立場から意見を交わした。

元教員として別職に就いた参加者が、自身のキャリア観を率直に語る場面もあり、「働く」をめぐる生の語りが多面的に展開された。1時間という短い枠では収まりきれないほど意見が出され、今後の企画継続の可能性を感じる場となった。

【⑧・⑨・⑩（ファシリテート・ワークショップ講座、講演会、講演会振り返り）について】



⑧・⑨・⑩の企画は、先に挙げた出前授業への参加を呼びかけた際、躊躇して参加に至らなかった生徒を意識的に呼び込むことを目的として構想されたものである。想定した対象は、将来の展望を描ききれず不安や迷いを抱えている生徒、また授業や学校生活への関心が薄れ、学校内に自らの居場所を見出しにくいと見受けられる生徒であった。そのような生徒こそが、多様な社会人との出会いや実践的なキャリア支援を通して、自己の可能性を再認識する機会が必要であると考えたためである。

これらの生徒が魅力を感じる企画とするため、生徒主体による講演会の実施を方針として決めた。講師の選定にあたっては、いわゆる学校的な評価軸から外れる経験を持ちながらも、社会の中で自らの居場所を築いてきた大人たちを対象とする指針をたてた。このような人物との出会いが、多様な生徒の参加を促すと考え、企画化を進めた。構想段階では産・学・民の関係者によるブレインストーミングを重ね、その後、生徒ミーティングを

¹⁶ 「18歳意識調査・第62回:国や社会に対する意識（6カ国調査）報告書」 日本財団 2024

通して意見を反映させながら内容を修正する、共同設計型の進行をとった。(以下の【資料2：第3回定例会資料】を参照)。

こうした企画を生徒が中心となって進めていくにあたり、講演会の準備段階から、生徒が主催者として運営に関わることを大切にされた。その一環として、ワークショップの運営方法やファシリテーションについて学ぶ講座を取り入れ、生徒たちは話し合いや役割分担を重ねながら準備を進めていった。その過程の中で、生徒自身が講演会の趣旨や参加してほしい生徒像を意識しながら作成した告知ポスターが、以下の【資料3：生徒作成ポスター】である。

<p style="text-align: center;">【資料2：第3回定例会資料】</p> <p style="text-align: center;">25年10月6日(月) 文責:北島</p> <p style="text-align: center;">社会探究同好会 2学期 第3回定例会</p> <p>★活動のねらい 高校生が「自分事」として扱った社会問題や地域課題などをテーマに、対話を通じて解決策を模索する。高校生主体で地域・企業と協力し、地域課題の解決策を構想・実践する。</p> <p>【経過】 ・ネオキャリアの高山さんとMTG(2025.10.3.(金))を実施(13時30分~15時30分:オンライン) →高山さんとの間の内容を確認し、課題の再整理を行ってほしい、ネオキャリアとの連携を提案していただきました。</p> <p>【今後の展開について(提案)】 ＜ステップ1＞ ①社会課題を定める/②社会課題を共有する場の運用/対話スキルを学ぶ/③コミュニケーションスキルを学ぶ(10月~11月) ① 社会課題協議: 社会課題に関する勉強会を実施 ・高校生が幅広く関係する社会的課題に絞っていく(今後の集客を意識して)、共通の関心を選定していく。 → (例) 進路・就職への不安感はどこからきているのか? など ・講師(オンライン、オフライン)を呼び、まずは今回のテーマに関する生徒の社会課題意識を高める。 → 地域のNPOの方などを呼んでみるのはい、地域との今後の連携を意識して。 ・本を通して予備知識を習得する(購入に関しては、補助金使用が可能) → …①と同時にする。 ② 社会課題を共有する場の運用・対話スキルを学ぶ ・ファシリテータースキル講座(高山さん:約1時間)/ワークショップデザイン講座(飯田さん:約1時間)を生徒向けに開催 → 主催する生徒限定で少人数でも構わない。放課後の1時間×2日間とか。</p> <p>＜ステップ2＞ … 助成会の中から呼べるゲストを選定(11月~12月) ・主題を「自分」ではなく、2世代、子ども、高齢者などの他者にして呼びたいゲストのジャンルを選定する ・予算内で登壇いただけるゲストを探す (例) 候補A= 本校出身者で在学中は「落ちこぼれ(ご本人のイングリッシュ)」だったが、現在成功している方 ・「最新たけいん」(明星HP:「落ちこぼれた学生時代から、世界のステージに登壇するに至るまで」リレーメッセージ) テクノロジー エンバジェリスト・筑波大学非常勤講師・名城大学非常勤講師/ 一般社団法人コミュニティマーケティング推進協会フェロー / 一般社団法人 EUCA 理事/Co-Founder ・ゲストとのコミュニケーションを生徒主体でおこなう</p> <p>＜ステップ3＞ … 講座を実施する(12月~1月) ・模擬練習を行う ・学校内で集客活動 30名の参加者を集める ・講座を含めたセミナーを実施する ①参加者を集めて事前ワークを実施 ②2名のゲストによる分科会を実施 ③参加者を集めて共有ワークを実施(アンケートに必ず答えてもらう。 ④アンケートを回収し効果をレポートする ⑤ゲストと事後コンタクトをとる ⑥広報用の記事をまとめる→ 届内先生が1学期の出前授業で行っていたことを生徒が実施。</p> <p>＜ステップ4＞ … フェューチャーセッションの準備と実施(1月~3月) ・企画、ワークショップデザイン、テーマ設定、ゲスト選定、集客(案内状の作成と送付) ・進行トレーニング、会場準備、本番実施</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	<p style="text-align: center;">【資料3：生徒作成の講座ポスター】</p> <p style="text-align: center;">参加費無料! 先着〇〇名まで</p> <p style="text-align: center;">社会探究同好会主催</p> <p style="text-align: center;">ファシリテート・ワークショップ</p> <p style="text-align: center;">基礎編 -10月、11月連続講座-</p> <p>▶日時</p> <p>第1回目 10/28(火) 15:40~16:40</p> <p>第2回目 11/6(木) 15:40~16:40</p> <p>※講座の進行の関係で両日参加できる方優先といたします。 ※定員になり次第締切となります。</p> <p>▶申し込み方法 希望者は社会科の「ひが先生」に直接申し込みしてください。 ※第1回の参加締切10月27日(水)16時まで</p> <p>▶ゲスト講師</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 10px;"> <p>飯田 貴也さん NPO法人新宿環境活動ネット 代表理事 専門は、環境教育・ESD・ワークショップデザイン・ファシリテーション。環境やサステナビリティをテーマとした出前授業や市民講座、イベントなどを年間100件ほどコーディネート。</p> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;">  <div style="margin-left: 10px;"> <p>高山 功平さん 株式会社ネオキャリア人事戦略本部サステナブル推進 専門は、企業におけるサステナビリティ推進活動。サステナビリティをテーマとした出前授業や講座のファシリテーターやワークショップデザインをコーディネート</p> </div> </div> <p>▶会場:11-3教室</p> <p>▶こんな人にお勧め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合型推薦で受験を考えているスキルアップを考えている人 ・社会人との交流に興味のある人 ・人前で話したり、会議の進行をしたり、グループの意見交換などの担当を担っている人 ・社会探究同好会の活動に興味がある人 ・よくわからないけどなんだか面白そうと感じた人 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin-top: 10px;"> <p>互いの意見を尊重しながら対話していく力</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin-top: 10px;"> <p>進行役として気を付けること</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin-top: 10px;"> <p>みんなにおススメ!</p> </div>
--	---

・⑧：ファシリテート・ワークショップ講座の特徴

ファシリテート講座は、生徒が講演会を主催・運営する際に、全体を巻き込んで対話する場を形成する手法を学ぶ目的で実施した。ネオキャリアの高山氏とNPO法人新宿環境活動ネットの飯田氏を講師に依頼し開催した(1時間×2回)。

平日放課後に毎回10名程度が参加し、1学期に実施した出前授業とは異なる新規参加の生徒も見られた。家庭不安を抱える生徒や、学校を辞めたいと考えている生徒、生活指導案件に上がった生徒など、多様な背景を持つ生徒がこの企画に加わった。これらの生徒は筆者が授業担当している生徒たちであり、この企画を紹介したら参加の意向を示してきた生徒たちであった。学校のキャリア支援が届きにくい生徒にこそ届いて欲しい企画だと判断したゆえの声かけだった。

講座後には講師のもとに生徒が自然と集まり、進路相談が発生し、「NPOで収益化して働く道はあるか」「早く自立したいため、大学に行かず就職する選択肢はあるのか」など、生徒の率直な質問が多々でいた。家庭でも学校でもない斜めの関係の大人が語る言葉は生徒に新鮮に響いていた。

・⑨生徒主催の講演会（「あの人と語りたい」企画）開催について

講演会では、生徒が主体となり、告知ポスターの作成（【資料4】参照）、講師依頼、会場設営、司会進行（ファシリテート）、アンケート作成と回収までを担った。講師人選の観点としては、以下の2点を重視した。

- ・どん底からはい上がってきた経験をした人
- ・社会的に情報（書籍、HPなど）が収集しやすい人（事前学習でその人物を掘り下げ際の情報（書籍など）があると取り組みやすいため）

初回企画では、本校卒業生で本校HPのエッセイ企画にも掲載されている萩野たいじ氏に依頼した。「自由を扱えなかった学生時代から、世界のステージに至るまで」というタイトルで、高校時代にやりたいことを見いだせなかった経験から、高校卒業後に専門学校等を経て進路を切り拓いたプロセスについてご講演いただいた。

当日は、卒業生1名、高校生約10名、中学1年生3名が参加した。40分の講演に続く対話の時間では、「大学に進学しないという進路を選ぶとき、不安はなかったのか？」「家族の反応は？」「チャンスを活かすために必要な姿勢は？」「好きなことを仕事にするにはどうしたらよいか？」といった率直な質問が中高生から寄せられ、講師との双方向的な交流が生まれた。講演の後、講師を囲み、司会担当の生徒と広報担

【写真：ファシリテート・ワークショップ開催】



【写真：企業・NPOの方とのフリートーク】



【資料4：生徒作の講演会ポスター】

高校 社会探究同好会主催！
先着30名まで！

“あの人と語りたい”企画 第1回ゲスト・萩野たいじさん

「自由を扱えなかった学生時代から、
世界のステージへ至るまで」

進路選択に不安を抱いている人、将来やりたいことが見つからない人、社会人との交流に興味のある人、総合型受験のヒントを探している人などにお助めの講座です。
進路について考えるきっかけ作りに参加してみませんか？

★当日のタイムスケジュール★

- 15:50～ 開始/主催生徒のあいさつ
- 15:55～ 趣旨説明
- 16:00～ ご講話（萩野さん）
- 16:40～ 質問セッション
- 17:00～ 振り返り/感想共有/アンケート記入
- 17:15～ 総評と記念撮影
- 17:20～ 終了予定

講師 萩野たいじさん

萩野たいじさん プロフィール

元美容師で元音楽家。ソフトウェアエンジニア転身後、委託開発分野で起業。その後、技術者へリーチしたマーケティング、DevRel（Developer Relations）の道へシフトし、Developer Advocateとして主に外資系企業のAPACを担当し、現在に至る。Microsoft MVP、筑波大学及び名城大学にて非常勤講師も務める。Packt Publishingからの「Practical Node-RED Programming」を始め著書多数

11/25

15:50～17:20

企画運営：明星学園高校 社会探究同好会
 会場：明星学園高校 れいめいホール
 申し込み方法：① Web通信にて
 ② 高校社会科のひが先生に直接申し込んでください。
 ※ 定員となり次第、締め切りとなります。
 申し込み締め切り：11月24日（月）13時まで

当の生徒が自主的に独自インタビューを始める姿もあり、生徒の主体的な動きに成長を感じていた。

・⑩講演会の振り返りワークショップについて

講演会后、別日に「萩野氏の講演から、私たちは何を受け取ったのか」をテーマとした振り返りワークショップを実施した。参加者は高校生（1～2年）6名と、教員が2名、そして共同企画者の高山氏の計9名であった。約1時間、アイスブレイクを交えながら対話を中心に進行した。従来は講演会后にアンケートで感想を書いて終了する形式が主であったが、今回は「講演」→「個々の気づき」→「対話による価値共有」→「次回への課題形成」という新たなプロセスを導入した点に特徴がある。

参加した生徒からは、「萩野さんはチャンスを逃さず成功の道を切り拓いていた」「自分にとって価値ある“チャンス”を察知する感性があると感じた」「失敗を糧に努力し続けた姿勢が印象に残った」といった声があがり、今後講演会を企画する際の質問の軸やテーマ設定の視点になり得ることを参加者間で確認した。

【⑩（「ESD 推進ネットワーク全国フォーラム 2025」への参加）について】

5月・7月の環境出前授業の実践を受け、（株）ネオキャリアの高山氏、NPO 法人新宿環境活動ネットの飯田氏と共に、ESD 推進ネットワーク全国フォーラム 2025（環境省・文部科学省主催）にてポスターセッションでの発表をおこなった。ESD（持続可能な開発のための教育）の国内外の動向を学び、全国の実践事例と接続する機会となった。高山氏が作成したポスター概要を以下に掲載した。ポスターでは、今回の我々の出前授業企画が越境の学びとキャリア支援モデルの構築に実践的な価値があることを企業側の視点から、再定義していただいた。

【ポスターの概要】：（出典：ポスターセッション資料より）

■ 研究課題名：産・学・民連携による環境出前授業プロジェクト

～ 越境の学びを通じた高校生の意思決定力育成とキャリア支援モデルの構築 ～

■ 背景：高校生の約2割が「なりたい職業がない」と回答し、7～8割が「働くことに不安」を抱えるという調査結果が示されている。学校現場では、進路選択に必要な「社会との接点」や「アウトプットの機会」が不足しており、生徒が安心して挑戦できる“居場所”の創出が求められていた。こうした課題に対し、企業・NPO・学校が連携し、越境的な学びの場として小学生向け環境出前授業を企画した。

■ 目的：環境教育とキャリア教育を融合し、環境人材育成と進路支援を同時に実現する。産・学・民連携による越境学習を通じて、高校生の意思決定力を育む。

■ 実施内容：明星学園高校の生徒十数名が、明星学園小学校4・5年生（計150名）に

対し出前授業を実施した。授業テーマは「レジ袋とエコバッグ、どちらがエコ？」とし、「当たり前」を問い直す探究型授業を企業・NPO・大学生と協働で設計した。高校生はファシリテーターとして授業進行を担当し、企画・改善・協働の全プロセスを経験した。

■ 成果

・小学生の変化：多面的思考を体験し、「モノを大切に使うことがエコ」という本質的理解に到達。「視点を変えると世界が変わる」「当たり前を疑う楽しさ」などの気づきが生まれた。

・高校生の変化：社会人・大学生・NPO との協働を通じて、新しい“居場所”での成功体験を獲得。自己肯定感・帰属意識が向上し、ファシリテーション力・課題発見力・発信力が強化された。「教えることで学びの深さに気づいた」「当たり前をずらして考えることの大切さ」などの内省が見られた。

■ 考察：進路不安は「未来」だけでなく「今の居場所」に対する不安でもある。越境協働の場は、挑戦と承認を同時に生み、生徒の内発的動機と意思決定力を高めることが示唆された。また、環境教育の文脈

で“当たり前”を問い直す姿勢はキャリア選択にも応用可能である。

■ 今後の展開：明星学園との連携を継続し、2026年初頭に「明星フューチャーセッション」を開催予定である。本プロジェクトを、産・学・民連携による持続的なESD×キャリア教育モデルとして発展させる。

産学民連携の環境出前授業プロジェクト
越境の学びが、未来の意思決定力を育む。
 ～環境教育からキャリア教育への架け橋～
 ・株式会社ネオキャリア・NPO法人新循環環境活動ネット・学校法人明星学園

Background | 進路に不安を抱く高校生に、社会とつながる「越境の学び」を。
 ■背景
 ・高校の先立から人材会社のサステナブル担当へ、越境や協働型授業に関する相談が寄せられた。
 ・「社会との接点を通じて、本来に意思決定のきっかけを与えたい」との声。
 ・日本財団「ESD推進調査」によると、
 ・「なりたて職業がない」20.3%
 ・「働くことに不安がある」男性7割・女性8割
 本席に「アウトプットの機会」と「他校との越境協働」を提供するため、安心して他校前に赴くことに挑戦する環境所づくりとして企業×NPO×学校の産学民連携による小学生への環境出前授業を実施。

Purpose |
 ・環境教育とキャリア教育を融合し、「環境人材の育成」と「進路支援」の両立を図る。
 ・意思決定力を育む越境学習

Method | 企業視点の学びの三要素
 ●アントレプレナー（新しい価値を創出する力）
 ・授業企画や発表を通じて体験
 ●イントレプレナー（組織内で変革を起こす力）
 ・チーム運営や授業改善を通じて体験
 ●オウナープレナー（価値を捉えて共有する力）
 ・企業、NPO、大学生との連携により体験
 高校生が小学生に出前授業を実施し、3つの視点を同時体験。
高校生による小学生への環境出前授業
 ・明星学園高校の生徒が明星学園小学校4年生、5年生全クラスに出前授業を実施。
 ・産学民連携による授業の実施
 場：企業（ネオキャリア）
 学：明星学園、大学生（早稲田大学）
 此：NPO（新循環環境活動ネット）、高校卒業生

授業内容
 ■授業テーマ：「レジ袋とエコバッグ、どちらがエコ？」
 ・「当たり前」を問い直す授業を協働チームで設計。
 ・協働に早稲田大学で環境サークルOBを招き、専門的な視点を導入。
 ・10名の高校生がファシリテーターとして進行役を担う
 ・10名の高校生が振り返りのワークショップを担当
 ・大学生、企業・NPOがゲスト講師として登壇
 ・小学生は15名に出前授業を実施
 ・「レジ袋のエコバッグ」ではなく「ものを大切に使うこと」がエコという本質を伝える授業

Result | 小学生の変化
 ・「一つの視点で決めつけない」多面的思考を体験。
 ・「モノを大切に使うことがエコ」と本質に到達。
 ・「視点からの重要なキーワード」
 「視点を変えると世界が変わる」「当たり前を疑うのが楽しさ」
高校生の変化
 ・社会人、NPO、大学生との協働を通じて、新しい「居場所」での成功体験。
 ・自己肯定感と帰属意識が向上。
 ・ファシリテーション力・課題発見力・発信力が向上。
 ・「視点からの重要なキーワード」
 「教えることで学びの深さに気づいた」
 「当たり前をずらして考えることが大切だと思った」

Result | 未来を描く前に、「いま」を整える
 ・進路不安は「今の居場所」に対する不安でもあり、未来の不安は“今”の居場所を作ることで解消できる
 ・学校では提供が難しいインストラクター（越境協働の場）が、後援と承認の両立を基に、意思決定力を育む。
 ・他者との協働が内発的動機を高める。

Conclusion and Future Directions | 越境の学びが、未来の意思決定力を育む。
 ・教える立場の経験が、最も深い学びを生む。
 ・「当たり前」を問い直す姿勢は、環境教育だけでなくキャリア選択にも通じる。
 ・多様な協働型授業の企画・実施を重ねる中で、自分の本質に出前授業型を模索。
 ・現在も明星学園との連携を継続し、2026年初頭に「明星フューチャーセッション」を開催予定。
 ・産学民連携による持続的ESD×キャリア教育モデルとして展開

References | 日本財団「ESD推進調査」
 第6回テーマ「就職・仕事観」/第6回テーマ「国や社会に対する意識（6ヶ国調査）」
<https://www.repoon-foundation.or.jp/>

ESD推進ネットワーク全国フォーラム2025

・ポスターセッションを通しての成果と示唆

当日のポスターセッションでは、環境省・文科省担当者、ESD推進ネットワーク、企業、教科書会社、NPO、探究導入校の教員など多様な層が我々の企画に関心を寄せてい

た。その交流を通して、本実践が学校内に閉じた取り組みにとどまらず、全国各地で行われている探究やキャリア支援の実践と接続し得る可能性をもつことを実感した。多様な立場の参加者との対話は、活動を見つめ直す視点を与えると同時に、今後の実践の広がりを考える手がかりとなった。

さらには、キャリア支援が「持続可能な生き方の探究」と結びつくことに気づかされ、また全国の探究活動に関わる実践家たちの取り組みに触れる中で、今後の実践に向けた示唆を得ることができた。

【写真：ESD フォーラムのポスターセッション】



4. 実践の成果と考察

(1) 活動の評価方法（アンケート分析・会話分析）

本章では、本実践の分析として、アンケート回答に基づく結果と、筆者が生徒との対話を通して捉えた変化を報告し、それらをふまえて「研究課題」に示した4点について考察する。

(2) 生徒アンケートの報告

【調査概要】

アンケート調査は、企業・NPO・学校が連携して実施した出前授業、講演会、ワークショップ等の一連の探究活動に参加した高校生を対象として実施したものである。アンケートの調査期間は2025年12月1日から12月16日までとした。対象高校生の15名にアンケートを配布し、10名から有効回答を得た（回収率：67%）。

本調査の実施にあたっては、事前に調査の目的、回答内容の活用範囲、個人情報の取り扱いについて説明を行い、参加は任意であることを明示した上で、同意を得た生徒のみを対象とした。なお、調査への協力・不協力が学校生活や学習評価に影響を及ぼすことは一切ないことを、あらかじめ参加者に伝えている。

回収した回答については、研究目的以外には使用せず、個人が特定されない形で集計・分析を行った。分析にあたっては、選択式回答の集計に加え、自由記述欄の内容も含めて整理し、本活動が生徒の進路観・社会認識・主体性に与えた影響や、今後の改善に向

けた示唆を検討した。

【回収結果の概要】（アンケート項目の①以外は複数回答可のアンケート項目である）

アンケート項目	回答人数	考察
①活動全体の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・「とても満足」(8名) ・「満足」(2名) 	<p>回答者全員が肯定的評価を示しており、特に「期待以上の経験が得られた」という回答が高い割合を占めた。学外者・社会人との接点が動機付けに働いたことが評価の背景にあると推察される。</p>
②進路意識への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・「新しい価値観に触れ視野が広がった」(8名) ・「外部の大人の話の重要性に気づいた」(7名) 	<p>「興味の幅が広がった」「将来像が明確化した」など、内省的变化が複数確認された。また外部講師や社会人との対話が、将来に対する思考の「起点」になったことが読み取れる。</p>
③学校主催の従来型の講演会と本実践との違い	<ul style="list-style-type: none"> ・双方向型コミュニケーション(8名) ・高校生主体の企画(4名) ・運営側として関与できた点(4名) 	<p>従来型の受動的な講話形式から、参加型・対話型・協働型を意識した企画であることを生徒たちにも認識されていたことが読み取れる。</p>
④活動参加による変化	<ul style="list-style-type: none"> ・行動してみる大切さに気づいた(4名) ・外部との関わりが増えた(3名) ・調査・企画に自信がついた(2名) ・社会課題の関心が高まった(2名) ・学外との関わりを通して社会を具体的に捉える視点ができた(2名) ・進路、学校生活に主体的に向き合う気持ちが増えた(1名) 	<p>本活動が生徒の意識や行動に一定の影響を与えたことがうかがえる。特に「行動する大切さ」への気づきには回答が多く、外部の企業・NPO等と関わりながら企画や調査に取り組んだ経験が、生徒の行動への心理的ハードルを下げたと考えられる。一方で、進路意識への影響は限定的で、継続的な支援を通じて、学びを進路選択へつなげる工夫が課題である。</p>
⑤参加理由	<ul style="list-style-type: none"> ・内容に興味があった(3名) ・同好会に興味があった(3名) ・友人に誘われた(2名) ・社会問題を知りたい(1名) ・自由記述(「先生の声かけ」「知見を広げたい」「大学で産学連携があるため経験したかった」「教える立場を 	<p>自主的・目的意識のある参加動機も複数確認されたが、「筆者や友人に誘われた」という生徒も3名確認された。後者の3名は、キャリア支援からもらえるだろうと筆者が感じた生徒でもあり、このような生徒たちをどのように巻き込むのが今後の課題である。</p>

	経験したかった」)	
⑥今後望む企画	<ul style="list-style-type: none"> ・調査・プロジェクト型活動（6名） ・外部施設見学（5名） 	生徒の関心が知識を得る学習段階にとどまらず、外部と関わりながら調査・企画を行う実践的な学びへと広がっている様子が読み取れる。体験を通じた主体的な関与が、探究への意欲を高めていると考えられる。
⑦社会に対する認識の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な価値観の存在を理解した（6名） ・身近なところに課題があると感じた（5名） ・社会課題は簡単ではないと感じた（5名） ・自分にも関わることがあると気づいた（2名） 	生徒が社会課題を抽象的な概念として捉える段階から、身近で複雑な現実として理解する段階へと認識を深めている様子がうかがえる。また、自身の関与可能性に気づく生徒も2名だが現れはじめていることも注目したい。

【アンケートの回答の全体考察】

生徒にとって視野の拡張や進路形成の初期段階としての自覚、また社会との接続が自覚化されたという点では、一定の教育的成果が得られたと評価できる。

そのことをふまえ、アンケート調査から本実践の教育的意義を3点あげてみた。

①産・学・民連携の体験が生徒たちの自己効力感を高める効果を示していた

生徒は学外の大人たちと継続的な対話やキャリア支援を受けることで、単に情報を得る段階を超え、体験を通して「自分はどのように社会と接続できるか」を問い始めていることが少なからず確認できた。これは探究学習の本質である主体性・当事者意識の萌芽と捉えられる。

②社会的距離の縮小が学習動機を育んだ

社会人・大学生・NPOとの関わりにより、社会は遠い世界ではなく接続可能な領域であるという認識が形成されつつある。この距離感の変化が、挑戦しようという行動意欲や意思決定の契機となる可能性が高いと考える。

③「参加する講演会」から「学び続ける活動」へ

企画や運営、当日の対話、振り返りまでを生徒自身が担ったことで、講演会は一度きりの「イベント」ではなく、考え続ける「学びの過程」として機能したといえる。この関わりによって、生徒は受け身ではなく主体的に活動に向き合い、自分の経験を振り返りながら次の行動へとつなげていく姿勢が育まれていた。こうした点は、活動を継続・発展させていくうえで重要な要素である。

【アンケート回答より見えてきた今後の課題と方向性の検討】

本活動を継続・発展させるにあたり、以下の改善点が挙げられる。

- ①多様な生徒が本企画に参加しやすい方法の検討が必要である。
- ②産・学・民連携の活動を今年度で終わらせず、継続的におこなうことが、さらなる生徒の意識・行動変化をうながすことにつながると考える。
(例) 調査→企画→実施→検証→報告の循環を意図的に設計する、など。
- ③生徒自身の振り返り手法をより確立化することで、大学への総合型選抜の資料として活用可能になると考える。

【3】生徒の会話分析（生徒に見られた変化）

ここでは、高校生が社会人・大学生・NPO 関係者との協働的な関わりを通して、どのような影響や行動変容が見られたのかについて、「ファシリテート・ワークショップ講座」および「講演会『あの人と語りたい』」に参加した高校生3名の事例を報告する。

【A さんの変化】

A さんは家庭環境に不安定さを抱えながらも、自身の進路について着実に努力を続ける生徒であり、企画⑧・⑨から継続的に参加した。過去に、自身の家庭環境を考慮して「高校卒業後、収入が得られる進路を早く確保したい」と筆者へ相談していた背景がある。

アンケートでは、「挑戦して取り組むことの重要性に気づいた。人の話を聞き、そこから応用する姿勢が大事だと感じた」と記述しており、進路形成に対する主体的な気づきが確認できた。また、(株)ネオキャリアの高山氏に「高卒での就職の可能性」について質問するなど、社会人への接続を個人的テーマとして捉え始めている姿があった。

家庭では進路相談の対話機会が「ほとんどない」と語っており、高山氏やNPOの飯田氏との対話の場は、A さんにとって家庭でも学校でもない第三の空間（サードプレイス）として機能していたことが推察される。対等に意見交換ができる場の存在が、自己効力感の形成に寄与していたと考えられる。

【B さんの変化】

B さんはAさんと友人関係にあり、誘いを受けて企画⑧・⑨に参加した。参加前は、授業中に恒常的な居眠りが見られたり、課題の未提出が多かったりと、学校生活への意欲が低い状態であった。しかし、活動への参加後は授業態度に緩やかな改善がみられ、学習姿勢にも前向きな変化が確認された。

本人への聞き取りによれば、「学校を辞めたいと思う時期があり、授業にも身が入らなかった。しかし、高山さんたちと話して“高校卒業後に働く道もある”と知り、高卒資格だけでも取りたいと思った。授業に向き合うようになったら、理解できることが増えて勉

強に対しても、もう少しがんばってみようと思えた」と述べており、キャリア選択肢の具体化が学習意欲に転化した事例といえる。

教室内での振る舞いや廊下でのやり取りからも、周囲の教員が変化を認識できる程度の改善が確認された。他要因の影響も想定されるが、本企画が意欲回復の契機となった可能性は一定程度認められる。

【Cさんの変化】

Cさんは知的関心が高く、大人の言動や授業内容をよく観察する生徒である。一方で、学校生活では継続的な取り組みが苦手で、職員室でもネガティブな案件で名前が挙がるが多かった。企画⑧・⑨を筆者が紹介した際には強い興味を示したものの、打ち合わせへの参加が継続しない場面も見られた。

しかし、講演会では自ら司会役に立候補し、その役割を果たした点は顕著な変化であった。立候補の理由については「面白そうだったから」と述べており、短期的ではあるが自己決定に基づく行動が確認できた。一方で、過去の生徒指導案件が後に発覚し、再び学校指導の対象となった。その指導面談の際、筆者との対話の中でCさんは次のように語った。

「小学校の頃から指導対象者として扱われ、話すことより黙ることを覚えた。叱責に慣れ、偽る語りをするようになった。しかし、今回の生徒指導の件で色々考えさせられ、もう一度受験勉強に向き合いたいと思った。」

この発言から、Cさんにとって学校は指導・評価の場であると同時に、状況次第では社会や進路へと再接続する機会を提供しうる場でもあることがうかがえる。企画参加が直接的な改善をもたらしたと断定はできないものの、司会経験や筆者との対話の蓄積が後の内省と語りの契機となった点で、キャリア支援と生活支援が重なり合う事例といえる。

【会話による総括】

3名の事例を通して、いくつかの重要な示唆が得られた。

社会人との対話は、進路について考えるきっかけになるだけでなく、自分に自信を取り戻すことにもつながっていることがうかがえる。また、キャリア支援はそれ単体で成り立つものではなく、生活面や学習面の支援と結びつくことで、より効果を発揮することが明らかになった。

こうした変化は、進路決定や学力向上といった目に見える成果にすぐ表れるとは限らない。しかし、生徒が自分の思いを言葉にし始めたり、学ぶ意欲を取り戻したりするなど、その過程そのものに着目することが重要である。

以上より、本企画は「外部と連携したキャリア支援」とどまらず、学校の中で孤立しやすい生徒と社会をつなぐ接点として機能していたととらえられる。

(4) 研究課題に対する達成度と課題の整理

本報告冒頭であげた4つの研究課題は本実践においてどの程度達成できたのか、以下に検証していく。

研究課題1：多様な立場の大人との対話機会は、高校生の進路観・キャリア観にどのような変容をもたらすのか。

本実践後のアンケート結果では、約8割の生徒が「新しい価値観に触れ視野が広がった」「学校外の大人の話に重要性を感じた」と回答している。さらに、会話による事例記述で示した3名の生徒の変容（学びの主体化、学校への認識転換）からも、家庭・学校以外の価値観に触れる経験が進路意識に影響を与える契機となることが確認された。

今後は生徒の変容を継続的に追跡できる評価手法（インタビューなどの質的データ）も取り入れて分析していきたい。

研究課題2：学校内にサードプレイスの対話拠点を設置することは、主体的学習意欲および社会理解にどのように影響するのか。

産・学・民連携のキャリア支援は、学校でも家庭でもない斜めの関係の大人たちの存在がサードプレイスとしての心理的・空間的居場所を生み出していた。そのことにより、学内の学習と社会が接続する意義が生徒自身に言語化され、特にBさんの事例にみられるように「目的意識の獲得 → 学校生活の立て直し」という態度の変容をうみだしていた。学校内で社会とつながる大人たちとの接点が存在することにより、従来の教室空間では生まれにくい自己肯定感・自己決定感の回復にもつながっていたといえる。

研究課題3：異世代協働の場は、高校生の自己効力感や「未来を選択する力」の形成にいかに関与するのか。

今回の9か月間の実践では、将来を自分で選び、具体的な行動に移す、といった大きな変化までははっきりとは確認できなかった。一方で、産・学・民連携による対話の場を通して、自分なりに考えを立ててみたり、自分自身について見つめ直したり、将来の姿を言葉にしようとする様子は、複数の生徒に見られた。これらの変化は、すぐに行動に結びつく段階ではないものの、将来を選ぶための次なる段階に入ったものと捉えることができる。今後予定している「フューチャーセッション」は、将来の選択肢を実際に試しながら考える場として機能すると考えており、引き続き本課題について検証を重ねていきたい。

研究課題4：学校と地域社会の接続は、“遠い社会”を“身近な社会”へと転換する契機となりうるのか。

ワークショップ講座後に自主的に企業担当者と対話した B さんが学習意欲および職業理解に直結した事例が確認されたことから、社会的他者との接触は、進路未分化期の高校生にとって意思決定の準備行為としては一定有効であることが把握できた。

一方で、本実践が地域コミュニティとの協働までには至らなかったため、今後は接続範囲の拡張（地域・自治体との連携）が課題である。

本実践が目指すキャリア支援の効果の萌芽が一定確認されつつも組織的連携が不十分という段階であることも認識して、次年度の計画を行っていきたい。

5. おわりに

本実践の推進にあたり、(株)ネオキャリアの高山功平氏、NPO 法人新宿環境活動ネット代表理事の飯田貴也氏、明星学園中学校元副校長の堀内雅人氏の協力が活動の大きな基盤ともなっていた。特に高山氏との出会いは、筆者の「進路指導」から「キャリア支援」へと生徒の自立支援に関する考え方を転換させる契機ともなり、本プロジェクトの始点にもなった。

2026 年度は以下を重点方針として継続的に取り組む考えである。

- ・フューチャーセンター設立に向けた運営体制の確立
- ・高校 3 年生を対象とした総合探究（2 単位）において、キャリア支援と SDGs 学習を組み合わせた授業の実施
- ・誰もが自分らしく働ける生き方を選択できる支援モデルの構築

本報告は途中経過であり、今後も検証と改善を続けていきたい。

〈参考文献〉

- ・レイ・オルデンバーグ『サードプレイス』みすず書房 2013
- ・文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的な調査研究協力者会議報告書』2004
- ・児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』ちくまプリマー新書 2013
- ・奥田知志，原田正樹 編『伴走型支援—新しい支援と社会のカタチ—』有斐閣 2021
- ・阿部彩『弱者の居場所がない社会』講談社現代新書 2011
- ・堀内一永「フューチャーセンター『未来を創造する対話の場』」『調査季報 vol.170』2012
- ・肖蘭,シュルーター智子,高橋彩「伴走的キャリア支援による自律した若者の育成の取り組み—北海道大学新渡戸カレッジの事例—」『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習 28』北海道大学高等教育推進機構 2021
- ・小暮真人「中高生と大学生によるフューチャーセッションの可能性—鹿角市の地域活性化に向けて（前編）—」武蔵野大学経営研究所 2023
- ・日本財団「18 歳意識調査『第 62 回-国や社会に対する意識（6 カ国調査）報告書』

2024

- ・野村恭彦『フューチャーセンターをつくろう』プレジデント社 2012
- ・渡辺三枝子 編著『新版 キャリアの心理学ーキャリア支援の発達のアプローチー』ナカニシヤ出版 2018
- ・帯木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティー答えの出ない事態に耐える力ー』朝日選書 2017
- ・J.D.クランボルツ他『その幸運は偶然ではないんです！』ダイヤモンド社 2005
- ・所由紀『偶キャリ。「偶然」からキャリアをつくる』経済界 2008
- ・武田ダニエル『#Z 世代的価値観』講談社 2023
- ・「NPO 法人キャリア base」サイトより <https://career-base.jp/> (2025年12月閲覧)
- ・一般社団法人「豊かな暮らしラボラトリー」のHPより https://masudanohito.jp/yutalab01/?utm_source=chatgpt.com (2025年12月閲覧)